震災からの学びつなごう

初の「防災&ママフェスタ」

こそだてシップ企画 備えの大切さ親子に伝える

大船渡

アウトドア流防災ガイド・あんどうりすさん㊨が家庭での防災テクニックを伝授＝リアスホール（電子新聞に動画、別写真あり）

大船渡市のNPO法人こそだてシップ（伊藤怜子理事長）主催の「乳幼児の防災&ママフェスタ」は2日、盛町のリアスホールで開かれた。東日本大震災を経験していない子どもや母親らに、防災への関心を深めてもらおうと初開催したもの。参加した親子らは家庭でできる防災術を学び、日頃から災害へ備えておくことの大切さを胸に刻んだ。

こそだてシップは気仙地区在住の助産師や看護師経験者らでつくり、平成23年から子育て支援を柱とする活動を開始。同25年にNPO法人化し、翌26年には盛町のサン・リア内に「すくすくルーム」を開設。独自に「幼い命をまもる防災月間」を設定するなど、防災の啓発にも力を入れている。

今回の催しは、震災から6年半の節目が近づいている中で、被災を経験していない親子も増えていることから、日頃から防災意識をもってもらおうと、9月1日の「防災の日」にもちなんで初めて開催。公益財団法人・いきいき岩手支援財団の「いわて子ども希望基金」の助成を受け、県大船渡保健所、気仙2市1町、気仙地区内の子育て関連団体が後援した。

開会行事で伊藤理事長は、「こそだてシップの活動を進める中で、6年半前の震災の状況が、経験した人からそうでない人へと伝わっていないと実感する。当時の貴重な経験と教訓が消えていくのは被災地として大きな損失。気仙は災害リスクの高い場所であり、安心して子育てするために防災意識も育ててほしい」とあいさつした。

午前中は防災講演と避難実技、正午からは子どもだけでなく母親たちも楽しめる各種イベントを実施。このうち、防災講演と避難実技には親子連れなど約60人が来場し、「アウトドア流防災ガイド」として活動する、あんどうりすさんを講師に学んだ。

あんどうさんは、「子育てを充実させると、おのずと防災への対応力も上がる」とし、近年発生が相次ぐ豪雨災害への対応を柱として実技も交えながら講話した。

この中で、赤ちゃんを連れての避難については「ベビーカーはタイヤの半径より高い段差を乗り越えられないので、抱っこやおんぶが望ましい」としたうえ、身近にある布を使った抱き方・背負い方を紹介。

避難先で屋外就寝する場合、「車は熱しやすく冷めやすいが、断熱シートを敷いたテントは快適に過ごせる」などと、随所に〝アウトドア流〟ならではのアドバイスも盛り込みながら、日常生活を送るうえでの備えの大切さを説いた。

猪川町の千葉早希さん（27）は、5カ月の娘の愛莉ちゃんと一緒に参加。「娘が生まれる前までは防災への関心や知識が薄かったので、しっかり学んでおきたいと参加しました。日頃からの備えが大切だと改めて感じました」と話していた。

会場ではこのほか、防災グッズの展示、防災食・アレルギー食の試食なども。正午からはキッズスライダー、紙芝居、フラワーアレンジメント、ハンドマッサージ、ネイルアートといったコーナーが開かれ、親子のにぎやかな声が響いた。